

---

# 討 論

---

## ①……………都市と境界

■阿部(司会) 一応3年間の研究会の締めくくりといたしまして、昨日27日から本日28日にかけて、研究発表会をしていただきまして、大体8時間近い報告をいただいたわけです。続いて午後1時から3時までの予定でシンポジウムの本論を始めさせていただきます。

この研究会は、一番初めに、古瀬さんのほうからご紹介があったように、「権力表象の場と儀礼」というテーマをたてておるわけですが、その上に、都市における交流空間という上部のテーマがのって、都市を歴史的に研究するというのを我々の研究会としては、場と儀礼ということで広げてみたいという視点を設定したんだというように考えております。

それで、午前中までは、皆様の報告にしたがい中身を3つほど時代別に、都城の成立、平安京、それから中世都市と、それぞれの場と儀礼の関係という順序をたてまして発表いただいたわけです。これからは時代別にいたしませんで、いわば総まとめと今後の展望ということが見えてくればということですので、改めて3つほどの山を立ててみたいと思っております。

第1番目は、ここで扱いますのが、都市ですので、一応都市の全体的な構成と、その境が中心になるかと思えますけれども、都市の内外における儀礼というようなことで、少し大きくとらえてみたいということが1つでございます。

それから、2番目に、都市の中核部、権力者がおりますような場所、そういうものの変遷と儀礼ということでございます。

3番目といたしまして、都市が形成されてから、都市民、民衆と支配者までが住むわけですが、一応都市の住民と儀礼というようなことで、儀礼としての本論、都市的なものの形成、あるいは実態というようなことについてお話しいただければと思います。それぞれをあまり時代で区切ってしまわないでやりたいと思っております。

それから、一番最後に中国、あるいは朝鮮半島の都市、あるいは都城の話も出てきましたので、東アジアにおける日本の都市の特質といったものについて、簡単な展望をつけ加えたいと考えておるわけです。

またそれぞれ、午前中までの発表で、言い足りなかったことからお始めいただくとなかなか時間がかかるかと存じますので、発表いただいたことについては、まとまったことにいたしまして、話を発展させていただければと思います。

それでは、早速1番目の都市の全体的な構成ということと、その境、そういうところの儀礼についてお話をいただければと思います。今回のご発表では、古いところでは木下さんや、何人かの方

---

が発表の予定でしたが、あまりそちらに話が及ばなかった面もご置きます。一番初めにちょっと都市の成立というようなこと、あるいは都市の定義というようなことに、やはり簡単に触れておかなければいかんだろうと存じます。私の発表は飛鳥の話でございましたので、簡単に1～2、阿部のほうから触れさせていただいて、都市のほうに入りたいと思います。

都市の定義というような問題は、きのうお出でになりました北村さん、それから浅野さん、それから前に国府の研究で鬼頭清明さんがまとめておられるわけですが、そこでは鬼頭さんは、一応マルクスなどの見解に基づいてアジアの共同体が一般的に存在する地域の中では、都市の形成は、社会的な分業というようなことからきちんと見ていかなければいけないと言っておられて、都城を含めた東アジアのある段階までの都市というようなものは、社会の中にきちんとした基盤を持っておられない。社会の余分な単位であるというような言い方で、都市を見ておられる。

ですから、都市の形成ということが、いつまでたっても問題になるわけですが、それにつきまして、浅野充さんは、古代日本、朝鮮における国家形成と都市については、そういう見方では非常に不十分である。マルクスの言説では歴史的な東アジアの都市は解明できないし、前提として受け入れる必要はないというようなことを書いておいて、私もそれに賛成するわけです。社会的な基盤と申しますか、例えば中央権力ができたり、あるいは都城ができるというようなことについては、やはり1つの都市として、きちんと評価してよろしいんじゃないかというような議論があるということで、そこだけを紹介させていただきたいと思います。

それから都市の形成ということで、もう1点だけ触れさせていただきたいのは、日本の都市ということでは、先ほども言いましたように、都城が都市かどうかというのは議論もあるわけですが、一方で考古学的に吉野ケ里遺跡というような弥生時代の相当古い段階から、周りに堀などの、要するに防壁をめぐらしまして、内部に権力者の墓、あるいは邸宅、倉庫、あるいは生産工房というようないろいろな機能を持った施設がある一種の都市がもう既に形成されておるといふふうに見られる側面があるわけです。

それから、3～4世紀代には、奈良県の三輪山のふもとに纏向という遺跡があって、それも差し渡し1キロメートルを越えるような非常に大きな集落と申しますか、都邑というような1つの都市である。三輪山を視点とした宗教都市になろうかと思えますけれども、そういう実際に出てきた都市遺跡というようなものがあります。今後理論的な解明の必要性和都市史の前提となるらしい考古学上の遺跡の2点だけちょっと触れさせていただきました。

それでは、1番目のタイトルで置きます都市の全体的な構成とその内外の儀礼というような視点で話を進めさせていただきたいと思えます。

発表では、倭京、あるいは飛鳥について、時間的な拡大というようなことが図示されたわけですが、飛鳥という地域で都ができてくることにつきまして、古代史の先生方を中心にして、倭京的な存在形態という状況であるという評価の議論があるわけですので、内外の儀礼というようなものまで含めまして、簡単に少し仁藤さんに、都城のことでお話しさせていただきたい。

■仁藤 ご指名ですので、ちょっとお話しさせていただきたいと思えます。

確かに、景観的には倭京の段階は、要素としては、市とか寺とか宮とかが存在するので、都市的な様相は示すのですが、ただ厳密な議論といえますか、細かく見てみますと、後の平城京、あるい

は平安京などがある程度の完成形態と見るならば、大きなちがいがありません。大王の段階が濃厚に持っている人格的な関係すなわちその王が生きている間に、その人格的關係を基礎に形成された諸施設が、第一義的なものではないかと思えます。極論すれば単なる施設の集積であって、その王が生きている間だけ有効なものであって、その王が死んでしまえば、その關係が、1代限りで解消されると、次の王が、群臣らによって擁立されたりするわけですが、その王によって再び豪族とか、寺院とか、市とか、あるいは境界のようなものが、そこで定まるという形が、できあがるのではないかと考えております。都城制下の位階制に基づいた宅地班給、きのう北村さんも紹介されてましたように、位階に基づいて、その宅地の位置と広さが決まるという原理、すなわち平城京でいえば長屋王邸のように大規模な邸宅は内裏の近くに選定され、身分や位階が下になるほど、宮から離れたところに班給されるという形が、倭京、あるいは藤原京の段階では不十分だったという側面を、都城制の発展段階の中では、注目すべきではないかと思えます。

■阿部(司会) 倭京的な存在形態について、お話しいただいたわけですが、もうおひとかた、今泉さん、槻の木の本の広場について、前にご発表いただいたんですが、そこに中枢部的な機能があることをお話しいただいたんですけども、倭京、飛鳥をどうお考えなのか、触れていただけますか。

■今泉 律令制宮都とか律令制都城とかいうのは条坊制をもっているものを考えているわけです。その前の倭京の段階では歴代遷宮という形で宮がどんどん変わっていき、また一時宮が他の地方に出ることがあるけれども、だいたい飛鳥という一つの地域に宮が固定されていく。それからもう一つは漏刻台とか須彌山の園池とか槻木の広場に注意すると、そのような施設が宮の移動にも関わらず存在し続けるようになってくる。そういうことをみるとそこには律令制宮都とは違うけれども、やはり都市的な空間が形成され始めていると見ていいのではないかと。

仁藤さんはプレ都城の段階と書いています。そういう評価でいいと思いますが、今述べたことから斉明朝ころにはやはり都市的な空間が形成され始めていると考えています。

■阿部(司会) 倭京の状況につきましては、さらに議論があるだろうと思えますけれども、その倭京的な状況から条坊都市に移る経過は、いろいろところで触れられております。その条坊的な都城の境界祭祀ということでは、皆様よくご存じの道饗祭の祭りであるとか、それから四面の御門でやるような祭り、あるいは宮城、京城の四隅で神を奉るとか、それから唐の使い、あるいは遣唐使を出すときのいろいろなお祭りがある。そういうような境での祭りや内部での祭りもたくさんあるわけですが、岩本さんから朝鮮半島の都市について、お話がありましたので、東アジアにおける都市の比較ということについては、また述べていただくとして、日本の都城、都市の場合には穢れとか祓えとかいう側面が非常に強くあるんじゃないかというようなことでした。日本の都市にちょっと目を向けて少しお話しただけませんか。

■岩本 難しいですけども、ちょっと日本の都市の前に朝鮮のことを言いますと、私がソウルで暮らしてきてもっとも違いを感じたのはいわゆるパレード的なお祭りといいますが、神幸祭のようなものは現代的なパレードを除き一切ないわけです。向こうのお祭りというのは、やはり壇で、一般庶民のお祭りもやはりムーダンというシャーマンがきて祭壇を設け場所を決めてその場だけで行います。ところが韓国人が日本に来て驚くのは、お稲荷様はあるわ、お地藏さんはあるわ、信楽焼きのためきはあるわ、道路にいろいろ神様が祀られていると。日本の場合はやはり祭場というのが

道や街衢にあって、あるいは専らそこを利用し、そしてそれを外部に、陰陽の陰というか、それを凶や穢れとしてマイナスにみて排除していくように思われます。中国ははっきりわかりませんが、韓国の祭りの原理というのはやはり陰陽の調和なんです。

またこれもやはり神觀念の相違ですけど、日本と違うのは、動物霊といますか、日本ですと、卑近な例でいうと、コックリさんみたいなものもあるわけですが、そういったわけのわからない神様が、どうも見えてこない。厲祭も基本的には陰陽の乱れ、城隍神や無祀鬼神も神位とされますが、やはり天の仕業であるわけです。あるいは鬼神というのは人の霊ですが、『李朝実録』を見ていきますと、人のお墓をあばいてその骨を使って相手を呪ったりするわけで、人の霊が祟ることはあっても日本のように動物霊とかあるいは器物の霊とか、そういったものの祟りとは考えられない。厲壇においても、やはり天を祭る儀式と同じように犠牲を供えて祀るわけです。生贄というのものも、日本人にはなかなか理解できにくい觀念なのではないかと思いますが…。

話が広がっていつてしまいましたけれども、日本の都城ことはよくわからないので、私が教えていただくとして、ただ道を祭りの場に使うというのは大分違いが大きいようです。

■阿部(司会) 岩本さんのほうから、非常におもしろい視点をいただいた気がいたします。一応倭京、あるいは条坊的な、条坊に基づいた都城というようなことで話が進んできましたので、時代を下げまして、京都と鎌倉のほうの話にちょっと触れていただきたいんですけども。

京都のほうは、どなたがよろしいでしょうか。堀内さんどうでしょう。

■堀内 平安京の四角四堺祭、即ち、大内裏外の四隅と京師の四隅で行う四角祭、山城国の国境(和邇または竜華・会坂・大枝・山崎または関戸)で行う四堺祭にかかわってくるわけですが、最近、長岡京とか平安京で注目しているのは、特に長岡京で出ている左京六条三坊、六条大路と東二坊大路の交差点に相当する調査区で川の跡が出てまいりまして多量に土馬とか墨書人面土器などが数百個単位で出土しました。

それともう1つ興味深いのは、川の南岸沿いに墓が設けられている。従来都城の中には存在しないと一般的に言われてきましたけれども、実際には出てくる。しかも、そこから南側の東二坊大路さらに東側の六条大路になりますと、都市の区画すらもないということが判ってまいりまして、それが都城のもう1つの境界になるんじゃないか。平安京になりますと、朱雀門の門前で大祓えを行ったことがよく知られていますし、それから『三代実録』貞観七年(865)五月十三日条に、七条大路と朱雀大路の交差点で、後の御霊会につながる疫神祭が行われている。これも10世紀の史料にあるわけですし、だから平安時代でも早い段階から都城の外というのではなくて、都城の境壁のさらに内側に何らかの祭祀が行われる境界、区画が出てくるんじゃないか、そういうことを調査事例から考えているところなんです。

■阿部(司会) 京都のほうのお話をいただきましたので、ご発表のほうでも陰陽道というような視点で、鎌倉のお話をもう既にいただいておりますけれども、河野さんのほうから、ちょっと簡単におまとめをいただけますか。

■河野 鎌倉の場合、都市の全体的な構成が最初からわかりませんが、例えば条坊を持った古代都市の場合宅地班給などがありまして、都市住民をどう構成するか、特に官僚層を集めてくるかというようなことをやっているわけです。それに対して鎌倉は軍事的、あるいは政治的な都市であると

いうことで、当初に頼朝がある場所を占めて、御所の周り、あるいはある配置をもって御家人らを集中させているかという点、どうもそういう痕跡があまり見られないのです。

となりますと、都市の全体的な構成がまずはっきりしていない中で、どこに境を認めるかとなると、ほとんどわからないというのが正直な現状ではないでしょうか。ただ、後に北条氏の指導下で、私の発表しました陰陽道などが使われ、そこに商人・職人たちが入ってくる中で、幾らか中世的都市市民というものが成立してくるのではないのか、そこに境の儀礼なんかが出てくるとすれば、どこを境と考えるかは、権力者側のほうから出てくるのか、あるいは都市に集中してきた住民が民間信仰的に起こしてくるのか、後者については議論できるほどの資料がありません。最近、浜辺のほうで犬追物をやった馬場ではないかと思われる遺構が検出されており、源氏三代の将軍は相撲を取らせたり、笠懸をしたり、さらに船に乗って杜戸のほうまで船遊びをしたりしているので、ある程度前者の中にひとつの領域として空間的なまとまりが意識されていたのでしょうか。都市の新住民がそれをうけついただいのかどうかはかなり検討が必要かなと思います。

**■阿部(司会)** 鎌倉のほうのお話をいただいたわけですが、もうお一方、佐藤さんから、国府あるいは多賀城のお話をいただきました。そういう都市として見たといいますか、都市の構成、あるいは社会ということで、多賀城とか、太宰府とかが、問題になっておりますし、国府についても見直しが必要なんだろうと思いますが、地方都市的なものというような視点で、佐藤さんいかがですか。

**■佐藤** 地方都市として国府を見る場合には、こちらの歴博での国府研究の成果があるわけですが、その中で、従来考えられてきた例えば八町四方というような国府の画然とした区画というのが、どうも考古学的には実証されず、むしろ国庁とか官舎、あるいはそれに付随する諸施設を核としまして、次第に密度が薄くなっていくような形のあり方じゃないかというように考えられてきておると思います。しかし一方ではきのう阿部先生のご報告にあったように、大宰府の場合は、それなりの一定の区画があるのではないかという考えもありまして、今国府の境界をどこに持ってくるかということが、課題になっているところではないかと思います。

それについては、私なりの見解というのはないのですが、きのうご紹介した国司の赴任の際の儀礼をまとめました『朝野群載』の「国務条々事」ですとか、あるいは『時範記』に見られるような国司の赴任のときのいろいろな行事を見ると、やはり国の境なんですけれども、境界の祭りから始まって、それから国庁に初めて入るときだとか、そういう祭りが非常に儀礼化して整えられているという面がありまして、ある意味での境界意識というものはあるのではないかというように思います。

先ほどの京の場合に関しましても、『時範記』で赴任する国司はやはり平安京の外に出る境界でまたお祭りして出るというようなことをやっていますので、意識の上では境界というのは常に念頭にあるんじゃないかと思います。

**■阿部(司会)** ありがとうございます。大分大急ぎで倭京の段階から新しい段階まで、簡単におまとめいただいたんですけども、都市の構成とその境あるいは内と外側でも結構ですけども、その儀礼の状況につきましてお願いしたいと思います。

司会の立場ですが、後の京都のような形で、境の儀礼になる以前の非常に古い段階で、倭京など、7世紀段階に、倭京の24寺というような形で出てくる範囲、ないしその境目ぐらいのところに、北

のほうにも、南のほうにも庭園遺構らしい非常に大きな石組などがあって、外国の使い、あるいは内外の使いが来たときに、迎えたり、あるいは穢れを払うんでしょうか、そういうような施設があったんじゃないかと思えます。また、7世紀後半段階の日本の都城の付近にも、都市としての羅城と言いますか、防備施設というようなもので、ある境界が非常にはっきり画された段階があったんじゃないかと思っているわけでございます。少し古い段階の話ですけども、そういう実態から、儀礼的なもの、あるいは祭祀的なものへどんどん移り変わるというようなこともあるかなというふうに思ったので、ちょっとつけ加えさせていただきました。

今までの、仁藤さんから佐藤さんを含めまして、ご発表がありましたことについて、特にご意見、あるいはつけ加えるようなことはありますか。

## ②……………権力中枢の場と儀礼

■阿部(司会) 都市中枢部、宮都あるいは宮城の内部には権力が発現されるような儀式の場があるわけですけども、そういうものの実態、あるいはその変遷と儀礼という視点で、都市中枢部について少し入ってまいりたいと思います。

今泉さんに、中枢部の変遷ということの前提として、昨日の発表をかいつまんで、お話ししていただきたいと思えます。

■今泉 宮の中枢部では、内裏・朝庭という構造から、藤原宮の段階で大極殿が成立して内裏、大極殿・朝堂という構造ができる。次いで平城宮の段階で二つの朝堂の構造になるわけです。藤原宮の段階で大極殿ができてくるのはやはり大王制から天皇制へという問題と関係しているだろうと思えます。それから平城宮で儀式と饗宴の場を唐の大明宮の含元殿をまねて、それらを非常に重視した形で造ってくるわけです。それは藤原宮で1つの大極殿・朝堂が3つの機能を持っていたのが、2つの場に分れたということだけではなくて、大宝律令で儀式と饗宴を非常に重視する政治体制ができたので、儀式と饗宴のための新しい構造の施設を宮城の中央にもってきて、古い伝統的な十二朝堂型の施設は東にずらして造ったと考えられます。儀礼を行う宮の中枢部の構造の変遷は政治体制の変遷とうまく対応していると思えます。

■阿部(司会) 朝堂、あるいは内裏では、我々が発掘調査でとらえますような遺構の変遷の背景、というよりもその本体として非常にたくさんの儀式や儀礼があったわけですけども、それが、遺構あるいは文献の上にも反映するというお話だったと思えます。その辺につきまして、平安京のことで古瀬さんのほうから、かいつまんでお話しいただきたい。

■古瀬 繰り返しになりますけれども、今泉先生がおっしゃったように、藤原京、平城京と段階が進んでまいりまして、律令国家として儀式の場が一番整備されたのが平安宮の段階であると考えられます。

前日も申しましたように、朝堂院が国家的な儀式の場、それから豊楽院が国家的な饗宴の場というように定められて、一方で内裏が天皇の日常政務の場というようになってきます。

律令国家体制というのは、その辺が一番ピークではないかと思うわけで、10世紀以降は、それが変質していく段階だと思われるわけです。10世紀以降になりますと、朝堂院や豊楽院というのは、

もちろん使われはしますが、それまでのようには頻繁に使われなくなりまして、儀式の場としては内裏がクローズアップされてきます。

さらに院政期に進みますと、天皇は日常的には里内裏にいるようになりまして、摂関期においては内裏で行われていたような儀式が、里内裏で行われるようになっていくというようにまとめられます。今泉先生がおっしゃいましたように、こういったところに、権力のあり方が、儀式の場と非常に密接に関係していて、儀式の場を見ていくことによって、権力のあり方の変化をとらえられると言えるのではないかと思います。

■阿部(司会) ありがとうございます。中枢部の遺構の変遷並びに使い方というようなことについては、今泉さん、古瀬さん、それぞれ既に論文等でお書きになられて、有効な説として今も定着している側面もあるだろうと思います。中枢部、朝堂院、あるいは内裏などと、儀礼ということで、こういう視点があるんだというようなことがあれば、またどなたかお話しいただきたい。中枢部ということで、お話しいただきました関連で、小野さんのほうに少し時代を下げまして、権力中枢空間としての中世の状況をお話しいただきたいと思います。

■小野 私がやっていることは、中世といたしましても、いわゆる幕府はとかというスタイルと違っていて、その中のさらに戦国大名の館とか城下町ではどうなっていたということになってしまっていて、よく政治というものが見えてこないわけです。極端なことを言えば、戦国大名というのは一体あーいった館の中で、具体的にどういう機構で、どういう空間でいわゆる政治というのを動かしていたのかという部分が見えてこない。それは逆に言うと、かなり家政的な部分で、ほとんどのものが処理されてしまっているという裏返しなのかもしれませんが、少なくとも、京都みたいに、幕府機構のようなものが置かれているところは別とすれば、どこでもその辺の状況がよくわからないのではないかと思います。

ただ、一方で、儀礼的なといいますか、きょう発表したような儀式的な部分というのは、戦国大名クラスではどこでも積極的に取り入れていて、また館も同じような空間構造を持っていることが確認されます。従って、一定クラスの館内では、広く同じような儀式を行っていたという推論は言えるのだろうというように思います。一乗谷の朝倉館の発掘成果と、その館での將軍御成の記事はその具体的内容を検証できる少ない例です。

■阿部(司会) 小野さんに、地方の城館の中身ということで話をいただいたんですけども、京都の室町幕府とか、中枢部についてはいかがでございましょう。小野さんのお話にありましたような一乗谷などのような例と比べて、室町幕府の場合にはこうだということがあれば、お話しいただければと思います。

■二木 よくわかりませんが、室町幕府も義満より前の時代は、三条、二条、三条坊門など、中心部というか、下京に近いほうにあったと思うんです。祇園社周辺は、もともと六波羅が置かれ、六波羅探題が置かれた理由も武装集団といいますか、犬神人が出てくるようなものに結びつく要地といわれまして。ところが義満になると上京、内裏の至近距離に幕府を置いた結果公家化されていく。やっぱり内裏、朝廷と幕府という儀礼的なものが公家と武家という形で接近していくんじゃないかと思うんですけれど。

■吉岡(司会) 今お話しした室町幕府の移転に関連してですが、鎌倉幕府が大倉から宇都宮、若宮へ

と三転しますね。その背後事情が最近注目されていると思うんですが、河野さんのほうから要約していただけないですか。

■河野 実際には鎌倉政権そのものの性格と、さらに政権の実務的運営者の問題にかかってくると思うんですけれども。將軍御所イコール幕府であって、その実際の家政機関としての政所はかなりきちんと機能していたのじゃないかと思います。それが四代將軍以降、合議制を取っていく中で、恐らく一握りの武士たちが政治の実務にかかわってきて、さらにそれが北条氏のあやつりになる。そういう中で政治の中枢部、都市の中枢は何かというと、御所であり八幡宮であり、有力な寺等であってどこで後世の「会所の饗宴」のような権力儀礼を行うか見直されるべきでしょう。

そうなりますと、御所及び御所に類するような北条氏の屋敷であるとか、それと八幡宮、それから幾つかのお寺、これが都市の政権中枢のセットになってくると思うのです。その位置が鶴岡八幡宮を軸にして東西から南北に変更されてくる。その南北に変更される中で、陰陽師が働き始めるということが、権力中枢の性格の変化を示している。そこでの儀式は、武士的というより、公家的な形を装ったものになってくるような感じがある。嘉禄元年(1225)に宇都宮辻子に移転する。さらに同じ画内であるかどうかわかりませんが、さらに若宮大路の東面に移転する(1236年)という、幕府の移転の中に、公家の作法としての陰陽道がかかわってくるのですから、ある程度鎌倉の変質を見ることはできるんじゃないかと思います。

■吉岡(司会) 伊藤正義さんが最近、幕府三転、つまり「破却」を政権抗争とかかわらせて書いておられます。もう1つは宇都宮幕府の場合、泰時の都市鎌倉の整備のきっかけになった、そういった都市構造の変容とのかかわりあいも、これは結果論かもしれませんが、重要なポイントになりましょうね。

■河野 確かに大きな事件とつなげていきますと、結果論的には見えるんですが、『吾妻鏡』などを読んでいきますと、それよりも10年ぐらい前に、前浜あたりの土地を御家人に屋地として分け与えたりということをやっている。確かに現象的には泰時が都市を決めていく姿勢が見てとれますが、その前から都市の編成といえるものが出てきている。正月に碗飯を献ずるような儀式、あるいは八幡宮の放生会や、馬を引いたりする馬場の儀なんかを行う際に、だれがそうした役を実務的に割りふるのか気になります。

將軍のとりまきと、北条氏の言うことをきくとりまきとの中に、都市の中枢を変容させるようなあやしげな者たちー「相地人金浄法師」のようなーが、一枚加わっていたのではないのでしょうか。

■吉岡(司会) 1225年ですか、泰時が丈尺をうたせて、若宮大路の軸線を設定するわけですね。

■河野 あればそういうふうに住むべきか……。ちょっと字づらからすると無理な気がするんです。陰陽道の議論ですし……。

■吉岡(司会) あるいは戸主制も同時的に施行されたという意見もあるようですが。

■河野 時期的には近いのですが、記事からすると飛躍があるんじゃないかと私は思います。

■吉岡(司会) そうですか。泰時以前は都市景観として未熟というか、極論すると「都市」とは言えないのではないかと、みたいな意見も鎌倉ではあるように聞いていますが……。

■河野 確かに源氏三代の間は、最初に言いましたように、都市を築くために宅地班給を行うような権力者の意志、ないし官僚に相当する人間を集めて都市をつくるという意識が希薄じゃないかと

---

いう気がします。逆に泰時以降、保守的・公家的になってくるのは間違いないでしょう。ただ、誰がどういう方針でということは、よくわからないのですが……。

■阿部(司会) 鎌倉の問題は、報告書のほうでも掘り下げていただきたいと思います。もう一度になりますけれども、佐藤さんから地方官衙などの中枢部ということで、国司館、あるいは国庁についてお話をいただいた。国司館もある程度公的なものじゃないかというお話だったと思いますが、その国庁の配置と儀礼的な側面ということで、少しお話しただけならと思いますが。

■佐藤 私がお話ししたのは、国府の施設の中で、国庁と国司の館が国司をめぐる政の儀式や饗宴の場として、非常に重要な役割を果たしていたということです。これは、国司の場合は、中央から地方に派遣される官人ですから、在地の豪族たち、在地首長以下の人たちと接する際、その支配関係を再確認する場として、そういった儀式とか、饗宴が重要な機能を果たしたということです。そして、その場として国庁と館が重要な役割を果たしたということです。そして、その際に国庁は本来元日の朝拝とか、その後の宴の場として設定されているわけですが、次第に国司の館のほうに饗宴の場が移っていったのではないかと思います。

国府の中でも、そういった宴の機能が国庁から、館に移行するのではないかとことを考えますと、これまで国司をめぐる儀礼が唐風化することに応じて国庁の配置が変化するとされていることと、時期的に重なる可能性を考えたわけです。

また、饗宴の場の移行ということに関連しては、国庁の場合は、中央の場合の今泉さんが言われたような2つの朝堂のような施設がありませんで、1つしかないということが関係するのではないかと推測したわけです。

■古瀬 儀礼について時代を超えて感想を述べさせていただきます。日本の特色かどうかよくわからないのですが、拝礼と饗宴というのが、常にセットになって出てくるということがいえるのではないかと思います。それは今泉先生が、まず朝賀が成立して、それから饗宴が成立するというように言われていますし、日本においては君臣関係というか、主従関係のような政治的な関係を確認する場があり、それからその後、そういった上下関係を抜きにして、共同で飲食をして、共同体的な意識を高めるという形式がとられる。これは奈文研の橋本義則さんが言われている説です。そういったものが古代において成立しまして、それぞれの君臣関係は時代によってどんどん変わっていきまますし、儀式の細かい形態はもちろん時代によって違うのですが、そういった儀礼のあり方というのは、古代から中世にずっとつながっているのではないかと思います。鎌倉についてはお話がなかったのでよくわかりませんが、小野先生の將軍御成のお話などは、時代を超えて非常によく理解できるものがありました。將軍の御成については、まず主殿で主従関係を確認し、それから会所で宴会を行うというようなことで、古代で成立したことが、時代を超えて日本では延々と政治的な儀式として行われ続けていくのではないかなという感想をちょっと持ちましたが、いかがでしょうか。

■小野 全く同感です。きょう、話を聞いて、あるいは自分で話しながら、まさにそういう身分関係を確認するための儀式と、その後の饗宴というのがセットで、常にそして場も2つ用意しながらやっていくという全く同じスタイルだと思いました。でも、これはあまり学問的ではないですが、現代まで全く一緒ではないでしょうか。人間関係を結ぶ盃事というのは、結婚式で言えば、

---

三々九度ですし、後の披露宴というのは、まさに饗宴ですし、同じようなスタイルで、それがセット関係で現代もあるという。ただ、そのときに、それぞれの場に、どういう本質的な空間の原理、意味や機能を持たすかということに、各時代時代の変化がちょっとずつあるという、そこが注目されるんじゃないかというように思うのですけど。大きく見れば、時間を越えた共通性が認められますし、一方ではむしろ場の本質的な意味は何なのかということを見ることで、そこに各時代の特徴を見ることができるという、そんな点に注目をしたのですが。

今の儀礼と饗宴というように考えましたときに、饗宴の場において身分的な関係から完全に横並びの関係になるかということ、やはり高橋さんのお話にあったと思いますが、器の問題だとか、席次の問題ですとか、ある程度やはり身分関係みたいなものも、位階的秩序になると思いますけれども、官職的な秩序と位階秩序というのは、その位階的な秩序はやはり貫徹しているんじゃないかなと、古代においてですけれども、思います。

■吉岡(司会) そうですね、先ほどの土器の話に絡んで、宴座と穩座の関係を申し上げたんですが、私もどちらかというと潜在的にはやはり服属儀礼的な面を重視したい。そして共同体的な復活・再生儀礼みたいなものが同居していますけれども、あまり共同体的関係を穩座で強調できないのかなと思います。それから、そういった饗宴の中世的な特質といいますか、中世の物質文化やイデオロギーは、原理的に古代的なものが地域的・空間的に普及するという側面を当然持っているわけですが、やはり室町幕府、あるいは細川管領家と朝倉氏に代表される守護館の共通性、さらに鎌倉時代なら御家人とか、地頭・荘官といったクラスまで、カワラケの普及に象徴されるような形で公家風の儀礼内容がある程度入っていると思うんです。

そして、さっき中央政庁の移動の話が出ましたが、武士館にしても、15世紀の後半、場合によっては14世紀後半代にも動くと思うんですが。もちろん、城館や周辺を含めた地域社会構造内部、ないし相互の変容があって、あるいは色部氏の年中行事にみられる在地色の強い形式への転換とも連動してるんじゃないか。とにかく、南北朝でも14世紀の中ば、後半辺のところで社会・経済・文化面での大きな画期があると思います。これは先ほど祇園祭りでも触れられましたが……。

■山路 日本のそういう正式の儀礼の二重構造というのは、古代から現在までずっと貫徹されていると思うんです。中国や朝鮮の儀礼が、そうした二重構造を持っているのかどうかよくわかりませんけれども。日本の場合いわゆる神祭りという要素から、まず神を勧請する儀礼があり、その後に神と人とが一体になるいわゆる宴があるというのが、基本の儀礼になります。それは神ではなくて、権力構造の再確認という儀礼においても、結局最初にきちっとした再確認をやった後は、今度ある意味ではやっぱり無礼講になる。先ほど話が出てきた若干位階の差があるんじゃないかと言われましたけれども、でも基本的にはやっぱり後の宴の世界というのは無礼講になる、神と人においても、また人間の上下関係においても無礼講になるというのが基本ではないかなという気がするんですけれども。

日本の文芸で例えば会所の文芸として連歌とかいうのが出てくるというのも、これはやっぱり無礼講の文芸というか、少なくとも階層という、そういうものはなくなるものです。また、そういうところで行われる順の舞いというのがありますけれども、順の舞いというの、順番に自分の持ち芸をずっと回していくという形であって、確かにその座席においては、初めから順番に並び方と

というのが設定される可能性はありますけれども、そこにおける精神としては、やはり平等というか、同じ意識というのが、後の座においては出てくるのが普通ではないかという気がします。

それゆえに、お流れちょうだい、とかいろいろと日本人はやりますけれども、同じ杯を回していくとか、あれもやはり平等意識というか、主従関係をきちっと確認した後での結局一種の同じ意識というか、そういう中で、後の宴の座というのが持たれる。これはもう東アジア的な感覚であり日本的な特色なのかどうか、ちょっと私もわかりませんが、日本においては、いわゆる大陸文化が入ってくる以前からの二重構造意識というのは一貫した特色ではないかという気がします。

■古瀬 中国の場合は、詳しくは調べていないのでわからないのですが、『大唐開元礼』を見ると、やはり朝賀の後には、「会」という宴会がついています。形式的には日本の古代の拝礼とその後の饗宴というのは、多分中国のものを受け入れて成立した面が強いのではないかと思います。ただ本質的に見ると、中国の場合は、「会」のほうもかなり身分的なものが残っているような気がします。まだあまりきちんと分析していないのでわからないのですが。その点からいうと、饗宴の場で一体感を高めたいというのは日本的なやり方なのかなとも思います。今泉先生いかがでしょうか。

■今泉 今の話とは少しずれますが、平城宮では中央区の北の大極殿院で朝賀をやりますね。南の方は四朝堂があるから、僕は饗宴の場であると考えています。それらの場をみると、北の大極殿院では天皇が出御する大極殿は2メートルぐらいの高さの壇の上であり、その前方の下庭に臣下が並んで拝礼するわけです。この場合臣下は天皇を見上げる形になる。一方南の四朝堂で饗宴する時には、天皇は大極殿院の閣門に出てきて、臣下が朝堂に列座する形だと思う。この場合は天皇と臣下の目の高さあまり変わらないのです。こういうところからみるとおっしゃられるようなことではないかと思います。

これまでこのような問題を考える時、多くの場合建物の平面プランの構造の意味を考えるという方法でやってきました。発掘調査では平面プランが一番分かって、その他のことはよく分からないということがあられるわけですが、しかしこの方法のほか、例えば日本在来の掘立柱建物なのか中国様式の建物なのかなどの建物の様式の問題、今話した目の高さの問題なども念頭に置くと、方法論的にいろいろのものが出てくるのではないかと感じています。

■小野 先ほど儀式と饗宴がセットとなり、時代を超えた存在だという指摘がありましたが、私もさっき触れましたように戦国期まで大筋というか、本質的なところは恐らくそういうやり方を踏襲していると思います。恐らく中世において、そうした2つの部分が、空間意識や建物の機能分化の形で、最も明瞭な姿となって具現化されていったと思うのです。ところがそうした2つの空間原理の結合の世界の中に「奥の」とした空間、本来平等というか身分を排除した形の場の中に、逆に権力側がそういう世界にさえも「表の」原理を持ち込んで、権力の序列、権力表現の場に変えていってしまうというのが、ちょうど中世が終わって近世が変わっていく変換ではないかというように思うわけです。先ほど言いましたように、例えば城下町の構造がやはりそういうように変わって、二元的であったものが「表」の原理に一元化されてしまう。あるいは建築の構成では、そういった場の象徴であった会所が、近世にはなくなってしまうとか。あるいは先程、花頂院の花見の宴会の話をしたと思うのですが、宴会の酒宴の席でさえもはっきりした身分階層の表示がそこに打ち出されてしまい、その後の連歌の会のような、寄合の場にだけ平等空間が残るというようになります。御

成の空間意識で言えば、I部の原理がII部をのみ込んでいくのが中世から近世への変化と言えます。

■二木 今の小野先生のお話、中世から近世への変化ということをいわれたので、今思いついたんですが、確かに、室町、戦国ぐらまでは、儀礼の二重構造というか、儀式のあとに直会的な饗宴があるというような形があるのですが、江戸幕府などを見ていくと全然違ってきます。

それは、江戸幕府の年中行事儀礼などを見ていきますと、中世以来行われていたようなことが実質的になくなって、ほとんど将軍と大名との臣従の儀礼、拝礼の儀礼になります。例えば、正月三日です。これは一日に譜代家門、二日に外様、三日は証人、つまり人質を出仕させてまず拝礼です。それから後は、旧年中行事を、要するに三月三日や五月五日、七夕といった五節句だとか嘉祥、八朔、重陽、亥の子など、そういった日を大名の出仕日にするのです。外様大名などを江戸城に登城させる日で、八朔も江戸討ち入りの日といって、全部旧来の年中行事という式日を江戸幕府は外様大名を出仕させる日にするのです。要するに拝礼、臣従の儀礼をやる日なのです。それも初期には、確かに家康ぐらまでは、まだお酒を出したり、お流りをちょうだいしたりというのがあったような気がするんですが、家光以降になるとなくなってくるのです。

基本的に、大名、旗本、要するに五百石以上といいますが、石高は三千石以上のときもありますけれども、五位以上、大名は一人ずつ拝礼し、あとは位によって大勢並んで一遍に拝礼していく。ときにそれが嘉祥のときはおかしをもらうのであったり、あるいは亥の子のときはお餅をもらいますが、後は全部昔からのしきたり、年中行事に関係なく拝礼の儀なのです。それが全部身分、格式、位によって誰れ以上とか、三千石以上とかいったように、順次行っていく。もちろん江戸幕府では、控えの間が、溜の間、柳の間というように、殿中席次や控えの部屋も変わってきます。こういうふうに宴会の儀事だけ、中世から近世へ、江戸幕府になってくると、そういう二重構造が変わってくるような気がするのです。完全に儀礼が江戸幕府になると、将軍が大名と旗本、大名武家衆らに臣従を誓わせるというような拝礼の儀礼という感じになります。

■山路 先ほどの話で、主殿を中心としたところが「ハレ」の場、会所のほうが「ケ」の場というふうにおっしゃいましたね。

■小野 いいえ、そうではなく、主殿と会所を含めて接客空間として「ハレ」の場として見て、その「ハレ」の空間の中に御成の記述ですと「表」または「端」という言葉で意識される場と、「奥」という場の2つの空間があるということです。

■山路 両方とも「ハレ」という形ですか。

■小野 はい、そういうことです。

### ③……………都市と儀礼

■阿部(司会) 古代から変遷する都市につきまして、場と儀礼ということで2つの場、あるいは儀式と饗宴の二重構造というようなことと、それから近世にかけて、その変貌があるかどうかというような非常に興味ある点に達しました。そのままの話題で結構ですが、初めに設定しました3つの山ということについては、一応中枢部の問題は大体済んでいるような気がいたしますので、都市の住民といえますか、都市の民衆、あるいは支配者と儀礼、先ほどのご発表では、祇園会とか、賀茂

祭とか、いろいろなお祭りが出てまいりましたけれども、そういうところまで含めまして、今度は都市にまで広げたテーマについてお話を続けていただきたいと思います。

■古瀬 中枢部と都市の関係ですが、きのうも言いましたが、中枢部と都市との関係というのが、時代を追ってだんだん緊密になってくるのではないかと思います。先ほど鎌倉幕府の移転の問題が出てましたが、幕府が移転することによって鎌倉の中心的な軸線が変化するというようなことを言われていたと思います。ところが、平安京の場合は院政期になって、里内裏がいろいろ移転してもそういうことはあまりないみたいです。平安京はやはり条坊制にとらわれている都市といえますか、なかなかその枠を外せなくて、それではどうしたかという、院は白河とか鳥羽とか、郊外に行ってしまったというような感じがちょっとしたわけです。

平安京が条坊制にとらわれながらも、新しい町として形成されていくのはやっぱり室町幕府あたりなのかなという気がしたんですけども。

■仁藤 それに関連して質問なんですけれども、平安京のメインストリートというのは、本来的には朱雀大路が計画されて、それを使うということが前提にあったわけですが、それが使われなくなるといいますか、そういう時期というのはいつになるんでしょうか。例えば行幸などに上皇、天皇、あるいは将軍等が室町時代等になりますというわけですが、そういった人たちが南に向かうときには、どういうストリートを使うのかというようなことを選択の問題です。そうするとかなり都市の理念というか、変更を見られるんじゃないかと思います。

■二木 書いたものはいっぱいあるんだけど、頭に入ってない。

■高橋(康夫) 名古屋大学の小寺武久先生が、そういう研究をされてまして、大体11世紀から後は、朱雀大路は使わないんだという話だったと思います。そのかわりに、大路を使うはずのものが、もう大路も小路も、その差を気にしなくなって、適当に路を選ぶというか、棧敷のあるところを通るといって、朝覲行幸なんかでも、わざとねじ曲げたりしています。そういった、要するに律令的な条坊制的な道路の体系、秩序といったものを気にしなくなるのが11世紀ぐらいという話だったと思います。

■二木 方違えとは関係ないですか。朝覲行幸というのは、大体方違え行幸ですよ、中身は。

■高橋(康夫) えーと、それはそうですね、私はあまりはっきり覚えていませんけれども、いろいろなケースで、割りときつな路。

■二木 ええ、こうどっちに上るとか下るとか書いてあるのがありますけれども、方違えと関係あるんじゃないかと思っているんですけど。朝覲行幸というのは方違え行幸ですので、実質的にはほとんど。

■高橋(康夫) 方違えは何か。

■二木 義満などの室町邸とか、ああいう行幸や何かはみんな方違え行幸ですよ。中世の行幸は、……。

■高橋(康夫) 院政期でも結構方違え的な行幸をやっているようですけども、そのほかのものも含めて、確か小寺さんは検討されていて、先ほど申し上げたような説明をされたと思います。

■二木 ああ、朝覲は違います。朝覲は朝覲で歳首の行幸。私は勘違いしました。要するに義満時代の永徳の行幸、応永15年、それから義教の時の永享の行幸は全部方違え行幸の形を取っていると

いうんですけど。

■**山路** 平安京が崩れていく場合なんですけれども、平安時代にも、北辺の一条大路に対しては、非常に強い思いを庶民も貴族も持っていたような気がするんですが。一条大路とそれより北というものが。例えば一条戻り橋を初め、一条、それこそさっきの橋本さんのところでお話の出た一条棧敷に鬼が出る話とか。結局一条というのが、京域と、それから京外とのやっぱり境目であると。要するに境であるという思いが非常に強く残っていたんじゃないかという気がするんです。どなたかの論文に検非違使の管轄範囲も一応この京中の範囲が一条までが検非違使の範囲。それから以後は、山城国の別の警察権のほうに移るといってご論文がございましたですね。あれなど含めて、やはり特に西はもう全然だめで、東もどんどん発展していってしまいますけれども、北のこの一条大路の境目という境界に対する思いというのは、平安時代に相当強く精神的には残っていたような気がするんです。

■**吉岡(司会)** 行幸ですけど、今の朝覲行幸も含めてなんですが、これが都市祭礼の一環であるという説はよくわかったんですが、何かコースによって時代的な変遷が、都市支配のあり方に、どこかの部分で反映するというようなことは……。

■**二木** なかなか言えませんね。大体、朝覲行幸も室町にはもうないですよ。あれはいつまで続いた、朝覲の一番おしまい。『年中行事絵巻』なんかにあるような朝覲行幸というのは。もちろん鎌倉以降はないですかね。室町でも、行幸があったのは、永徳元年の行幸、『さかゆく花』に記されている室町邸行幸と応永15年の北山邸が義満、永享10年の室町邸で義教、それだけしかないんでしょうか。あとは豊臣の聚楽第行幸までありません。

ただ、これはちょっと余計なんですけど、仁藤さんの説は、天皇は動かなかった、京都から出なかつたというものです。しかし、もしかしたら出たかもしれないという例が1つあるんです。織田信長が安土に呼ぼうとしていた、実現していたかもしれない、死ななかつたら。そうすると江戸時代は全然出ませんものね。むしろ、宮中内から出てないわけです。あと、じゃあ南北朝はどうしますか、南朝は。

■**仁藤** 後醍醐はかなり活動的ですね。平安時代の後三条とか、かなり限られた天皇は、太上天皇的な動きをしている人がいます。すでに在位中から動いているという側面もあると思うんですけど例外的です。普通の天皇、まあ普通の天皇と異常な天皇といたら申しわけないですけども、一般的な幼帝とか普通の天皇においては基本的には内裏の奥にいて、京内かその周辺に出かけていく。

■**二木** 私はだから、必要なくなったんじゃないかなと思うんです。出る必要が。上皇さんは自由だし、個々出てるわけです、服装も簡単だし、牛車に乗っていくし、天皇はおみこしです。基本的には朝覲行幸だって、剣と璽は持っていくわけです。神器のあるところ、皇都だと。南北朝が吉野にあらうが神器のあるところは都なんだという意識と同じじゃないかと思うんです。もしかしたら信長が呼んでいたらおもしろかったなと。

■**阿部(司会)** ちょっと古い段階の話になりますけれども、倭京というようなもので、お話をしたときに、小治田宮というものが、飛鳥の中にありまして、その南に槻木の広場がある。

その小治田宮は後までずっと使われるんですけども、宮殿としては、どのぐらい生きていたか

らわからないけれども、その周辺に恐らく官庁街といいますか、官衙的なものがある程度ブロックで付属していた可能性があると思うんです。ところがそれに対して、いわゆる板蓋宮とか飛鳥宮と言われるのが南にあるわけです。さらにその南に朝堂があるなんていう構造はちょっと考えられないくらい狭い。何か、南に権力中枢を置いといて、北のほうに朝堂にあたるような槻木の広場があったというような、そういう論理構造というか、その後の都城では考えられないような構成を持っていったんじゃないかなと、思っております。それに対して宮殿が小治田宮から西のほうにどんどん伸びるような、飛鳥の盆地の外に出る、そんなことがあるものですから、飛鳥に宮殿ができ、小治田宮ができたときには中国との関係で、使いがくるものだから、もうあまり動かさない。槻木の広場も動かさないけれども、各代の宮は、飛鳥の中心部、小治田を中心とした中心部にあるのを前提に広がっていくんじゃないかな。5世紀、6世紀代の宮殿が出てくるとすると、古墳だとか居館のあり方からすると、南を向いておらないで違う方向を向いているという可能性もあるんじゃないかなとそんなことも考えてみておるんです。

仁藤さんにもお聞きしたいんですけれども、都市の住民というのはどう発生したかということで、いわゆる戸籍に載せられるような京戸ですね、京戸の形成。それから平安時代に入りましてから京に編付されるといいますか、京貫になるという形での都市住民の形成も、都市史のほうからすると、大きな問題です。さっき北村さんのお話では、共同体としては天皇（大王）と官人でいいんだからというようなお話でしたけれども。都市の民衆のお話で、仁藤さんにお聞きしたい。

■仁藤 基本的な属性として、官人なのか、京戸イコール官人と考えるか、あるいは、イコール農民と考えるかが、大きな分かれ目だと思います。つまり、京戸を、天皇を中心とした官人共同体と考えるか、一般の共同体に擬制した「幻想」として考えるかなんですが。やはり官人が都城の成立のもともとの根っこからすれば、第一義的ではなかろうかと思えます。

農民等も若干はおりますけれども、それは官人の家族であるとか、あるいは諸国から集められた付随的な、二次的な側面が強いのではないかと思えます。いろいろ議論のあるところだとは思いますが。きのうの北村さんの議論でもありましたように、基本的に京内には水田を班給しないということがあります。そういうことや、あるいは鬼頭さんの最近のご研究でも、平城京の人口の議論がありますけれども、官人の比率が出て、最近は……いつとき20万とかいう議論がありましたけれども、まあ10万ぐらい……少なくなってきております。それと律令に規定されている官人の定義ですね、そういうものを調べてみた場合は、かなり高い割合で官人及びその家族、それに付随する奴婢などが入っているわけで、それらを除いた純粹都市民的なものは、当初においては、それほど重要な意味を持ってなかったのではないかと思っております。

■阿部(司会) そうしますと、都市史として見た場合には、都市住民、一般的ないわゆる都市住民の形成というようなものは非常におくれているだろうということですか。

私なんか考えますには古い段階の飛鳥でも、あるいは平城京の段階でもお寺の行事とか、それから宮廷が例えばちょっと外へ出て、例えば皇城門外で歌垣をするというような儀式みたいなものは、古代からある程度あったんじゃないか。ただ、それが果たして、都市民を前提として見る、見られる関係、見るほうも見る場所に行くというような形が成立する時期というようなものがいつなのか。橋本さんの発表では賀茂の祭りなんかでお話があったわけですが、平城京段階あたりでは、

まだ見る民衆といますか、そういうのはあまりなかったというふうに考えてよろしいでしょうかね。

■古瀬 京戸については、1つは戸籍に登録されている人が全員京に住んでいたかどうかという問題があります。北村さんの前の論文で言うと、要するに五位以上と六位以下では、大分違って、五位以上は都に住んでいるけれども、六位以下の人というのは、まだかなり田舎のほうに住居があったんじゃないか。官司に勤める都合で、都にももちろん家はあるんですけども、本拠地はまだ京外にあるんじゃないかということを言われています。

ですから、戸籍にのせられた京戸が、全員必ずしも都に住んでいたかどうかというのはちょっと1つの問題かなというように思います。実際に都に住んでいる人をつかまえるようになるというのが、またこれも受け売りですが、きのうお話しされていたように在家役みたいなのが出てくる11世紀ですか、『小右記』以降の時代です。実際に住んでいる人をつかまえるようになってきて、在家役というものを課すようになってくる。それが見物人の発生と非常によく対応していることになるのだと思います。

■阿部(司会) 先ほどの二木先生のお話で、祇園会のお話をいただいたときに、御成について、これが権力の場、儀礼というようなことでは、典型的な場所だと。それから山路先生のほうから、その中でも幾つかの構成要素があるというようなお話をいただいたんですけども、その辺はもう二木先生におまとめいただいたようなことで全部できているような気もいたしますが、それは幾つかの時々の権力者が提供するようなお祭りとか、お祭りじゃない要素とのかかわりがあるか。いかがでございましょう、山路先生がおっしゃったようなことで、もう少しお話を。

■二木 そうですね、1つは京都支配という面と、それから今のお祭りのことと、2つで。やはり歴代の政権が京都を治めるということは大変なことだったと思います。これは律令制では、行政では京職だとか市司というのものが、さらに10世紀ぐらいからは、検非違使庁があり、鎌倉になってからは、今度は六波羅探題と京都奉行が補完的に支配して、そして室町になると、侍所、政所、それに山城守護職、京都奉行というやつ、これらが京都の町をいかに支配するかということに重点を置いてきたわけです。織豊期になれば、京都奉行とか所司代とか、内裏牽制につながっていくわけですけど、常にやっぱり京都の町をいかに押さえるかということがありました。それから祭礼で言いますと、古くから総社の祭りとか、一宮の支配をどう押さえるかとか。しかし、室町幕府の武家政権というのはやっぱり伝統的な公家政権とは違いまして、祭礼に直接関与するということはやっぱりできないという気がしますね。普通ですと氏神といったものが、藤原氏などそれぞれの氏族によってあるわけです。室町幕府、足利氏でいえば源氏ですから、氏神は石清水八幡宮ということになりまして、石清水放生会などには上卿を勤めたりすることもあります。しかし足利氏だけの源氏ではありませんので、なかなかお祭りに入り込めないわけです。

そういったときに、京都の祭りに入る。山路先生の言われたような新しい要素をもって入り込むということしかないでしょうし、それといま1つは、武家がデモンストレーション的に乗り込んでいくということに、一種の示威と懐柔というようなことがあるんじゃないかと思うんです。あとは戦国時代では、似たようなケースというのはあんまりないんです。恐らく豊臣政権が、太閤さんが死ぬと豊国祭なんていうのをやりますが、あれは非常に京都では熱狂的なものがあったわけです。

太閤さんが死んだ後でも京都の豊国社の祭りというのは、むしろそれを今度は江戸幕府はつぶして押さえつけちゃうということになってしまうわけですけども。地方では地方の大名たちが祭礼というものを通して、儀礼のことを支配しようとしたということがあるんでしょうが、やはり政権としては案外少ない。江戸幕府だってありません。日吉だとかそういったお祭り、江戸の祭りに直接入り込むということは江戸の町にはありませんよね。むしろ江戸の支配は、江戸町奉行が室町幕府では侍所に相当するような、いかに支配をするかという、そこに儀礼が都市の支配に絡んでくるといことは、案外武家政権では少ないような気がするんですけど。

■山路 僕はやはり何というんですか、権力の支配構造として、いかに「ハレ」の日をうまく創設するかということが1つあるんじゃないかと思うんです。民衆というのは、常に「ケ」の日ばかりで追い立てますと、それこそうまくいかないんで、その中にどれだけうまく適当に「ハレ」の日をつくり出して、押さえつけたものを爆発させていくかということが、権力の民衆支配の大きな要素だと思うんです。

だから、都会においても、また地方都市においても、「ハレ」の時空である祭りというものを、民衆の側もまた支配者の側も大切にします。祭りの時間・空間というのは、神の来臨の名のもとで、一瞬ではありますが、支配の秩序が均質もしくは逆転する。同時に社会秩序からも解放される、特別な時空なのですね。

そういう一見危険な時空を、うまく季節の巡りの中に適当に散らしておくというのが、支配者にとって重要な意味を持っているのだと思うんです。それは公家政権においても、また武家政権においても、いろいろと考えている。例えば江戸幕府における山王祭や神田祭。これは隔年で行われるのですが、町民が昇く神輿を江戸城内に入れて、その神輿に対して将軍がお辞儀をする。これは本来神輿に鎮まる神に対して将軍が拝礼する儀式なのですが、町民にとっては自分たちの昇く神輿に拝礼をするわけですから、溜飲を下げる。お互いがそれぞれに解釈することで、祭り執行の意味付けがなされ平和が保たれる。それが一種の権力による支配のやり方で、地方にはこのような意味あいを持つ祭りは結構多いわけです。現在でも東京オリンピックにしても、また大阪の花の万国博覧会にしても、当時の社会情勢・政治情勢を考えると、この手法による国家的規模のお祭りなわけですね。ハレの時空が持つ効用が、うまく現代でも生かされている。古代の賀茂祭にしても、古代から中世・近世を生き続けた祇園祭にしても、支配者の側から祭りを考えた場合、ずっと存在したひとつの原理であったと思うんです。

■阿部(司会) 今回の場の広がりというような点では、先ほどもちょっとお話に出ました高橋さん、何かちょっとつけ加えるものがあれば。

■高橋(照彦) 私が話したのは、主に都城なり国府なりの場で使われたモノ資料についてです。発表では平安時代初期の段階を中心にしていましたけれども、もう少し広く古代の場合を見てみますと、都城の中で権力を表すため、平安京に至るまでに例えば建物の屋根の構造が変化していきます。まず、当初板葺きですらなかった宮の建物において、藤原宮の段階になると寺にのみ用いられていた瓦が取り入れられ、それが平安京になると主要建物で緑釉瓦となっていく。そういうふうな、目に見える形で権力中枢の場を荘厳化していくという流れがあったわけです。ところが、時代がさらに下っていくにしたがって、例えば緑釉瓦が葺かれていた豊楽殿や大極殿なども緑釉瓦が葺かれ

なくなったり、建物そのものが機能しなくなったりしていきます。瓦あるいは緑釉の瓦を葺く、そのような側面によって、権力を可視的に外に示す必要性というか、そういうものが平安時代も下っていくと無くなっていくという動きを捉えられるような気がしております。

先ほど祇園会などの話の中で、將軍の御成がかなり華美であるということでした。それとの対比で古代をみれば、奈良時代段階では天皇がしばしば行幸していたのに、そのような行幸という形のものがやはり平安初期以降なくなっていくということになると、それはこの平安初期の段階を過ぎると天皇の権威を外に見せびらかすということが必ずしも必要でなくなったことを示すものだと思います。これは、先に述べました瓦葺き建物の変化などと共通した動きとして捉えられるわけです。その一方で、室町時代に將軍が華美に御成を行っていたのは、將軍の権威付けというか、権威の明確化というかが是非とも必要であり、むしろそれだけ権威が安定していなかったことの裏返しのようにも思われます。権力を表に出す必要性には時期的な変化があり、儀礼の形態なりそれを彩る装置なりもその権威付けの必要性和密接に関連しつつ変化していくように感じていますが、いかがでしょうか。

■仁藤 いや、おっしゃるとおりだろうと思うんです。すなわち天皇自身を権力なり権威として万人が承認するようになるのは、やはり平安期になってからだろうというように思うんです。そうすると天皇自身は何も宣伝する必要はないんで、むしろ、それを利用するのは武家になっていく、あるいは摂関であったりということになってくるんだらうと思うんです。その場合に天皇を引っ張りだして行幸をさせるという先ほどの話につながってくるのかなと。秀吉にしろ信長にしろ、そういうことで使う、引っ張り出すと。明治維新のときも、やはり天皇、王政復古ということでやはり引っ張り出すという、そういった大きなことも言えるのではないかなというように思いますけれども。

■吉岡(司会) 都市の構成について鎌倉の商工民、町屋のあり方が、近年ようやく面的調査が行われて実態が浮かび上がってきたのでお話をうかがいたいのですが……。

■河野 都市住民を考える際に、最初はやっぱり御家人役で所領の大小に従って、例えば二階堂は永福寺を建てるとか、若宮大路の側溝に関しても、御家人役で人足を出せというのが出てくるんです。都市構成の中で、いわゆる肉体労働者が相当数入っていると思いますし、鶴岡八幡宮にしても、御所にしても、相当はしためなどを含めて下級の勤め人というんですか、かなり抱えているんです。そうしますと、都市住民というのは、権力側に政治的ないろいろ動きがあると必ず使われるということがありますから、京都なり奈良なりでも下級官吏に相当する実際の働き手を相当持っていたと思います。さらに、鎌倉中期以降に商人が入ってくる、それから訴訟なんかで地方から出てくる人もいますし、「乞食」の問題もあります。ですから、住民がふくらんでくるのは、普通に考えていいんじゃないかと思うんです。

ただ、それが都市の儀礼や何かの見る側にあたるかという、鎌倉の場合あんまり儀礼として華やかに見せるのではないように思うんですが、鶴岡八幡の放生会であるとか、その際流鏑馬を行ったところなどでは、観客がいることがやっぱり前提になっていると思うんです。

さらに、將軍の方違えで、レジュメにもちょっと書いたんですけども、仁治元年(1240)に武藏野開発が犯土にあたるというんで、將軍がわざわざ鶴見の別荘まで方違えに出かけるんです。そのとき大変行列がきらびやかで、人々が感心したというようなことがありますし、『とはずがたり』

(1307年頃)などでも後深草院二条が来て(1289年)、八幡宮を見にいったら、いろいろな直垂を着ているのがいた、あるいは『海道記』などでも永福寺の伽藍が立派であるとほめたというんです。要するに見る、見られる関係は考古資料そのものからはわかりませんが、ある程度町の人口があって、その中で何か事を行う際にあるんじゃないかとは思えます。

■吉岡(司会) 商工業者の町屋の建て方、宅地の問題からいえば、そういう言い方でもいいと思うんですが、武家と商工業者の貴賤雑居というのが現場を見せていただいたイメージです。武家屋敷は御成小学校周辺(今小路西遺跡)では非常に整然としたエリアで建物が配置されていますが、そこから1歩外へ出ると門前市をなすというか、すし詰め状態で町屋が並んでいますね。それに対して道路を壊して家地を拡張するとか禁令は出しているけれども。京都なんかかなり早くからある程度自主的な町人の組織があり、上から設定された居住区分じゃないかとも思うんですが、貴賤雑居という点では中世的と言えらるわけだが、何か違いが……。

■河野 先ほど堀内さんがいわれたように、例えば平安期の段階でも、既に京の六条あたりで中世的な都市の外見が出てきちゃっていると。それから四条のあたりは、「町」という言葉でかなり早い時期からあるみたいですが。そういうことで、やはり都市の宅地割りを持ったような中核部と、それを取り巻く都市の外側部分「外皮」の部分と言いますか、これに商工業者が入ってくる。しかし、これはある程度コントロールされてはいると思うんです。ただコントロールは、常にやろうと思ってストレートにいくんじゃないかと、どうしても民衆の力のほうが強いので、違法行為がどんどん行われていくのは当たり前じゃないかと思うんですが。13世紀の前半(1215年)に商人の数を定めるという記事がありますので、ある程度は武士がコントロールしてはいると思うんですが……。

これは鎌倉の土地はだれのもので、だれがどういうふうに使ってよかったかというような問題にかかわってきますので、私にはむづかしい問題にすぎようで……。

■吉岡(司会) 町屋まで宅地班給をやったのか、やったらすれば、どの範囲なのか、というようなことは、現状ではつかみづらい状態にありますかね。

■阿部(司会) 福原さんのお話では、問題提起をお聞きしたんですが、私ら、遺跡を掘っている人間にとっては、門をめぐるというのが、お寺だけの、今生きているいろんな儀礼というだけではなく、実際に歴史的な例えば都城の門であるとか、その内と外でもいろんなお祭りや儀礼で、同じようなことをやっているようなんですよ。ですから割に福原さんが言われた話は、古代などと接点が出てくるんじゃないかなと思ったんですけども。ご発表になったことで、何かもう少しつけ加えるようなことはありませんか。

■福原 そうですね、発表したことは、すべてこれからの問題なので、古代史の先生などにお聞きしたいことがあります。まず1つは、佐藤先生を中心にお聞きしたいんですけども、民俗学では、坂迎えという習俗はどうしても遠隔地巡礼というんでしょうか、そういうところから帰ってきたときに、村境にいて、酒宴をはって帰ってくると。折口信夫以来、何か守護霊というか、巡礼は大変ですので、見守る神様がいて、村に来るときには、「ケ」に戻すので、そこで何かちょっと神様を離す神離れみたいなものをここでやるということもあります。『朝野群載』の「国務条々事」の坂迎え、あるいは『時範記』の山陰の国司を迎えるときの国境におけるああいう酒宴は、外部坂迎えで

すね。それから平安の院政期における熊野詣で行ったときに、京都はどこでしょうか、坂迎えをやって、お稲荷さんのところで、護法送りをやるという。ちょっと今詳しい出典は、僕が見ているのは、もっとずっと時代が下っちゃってのことなんですけれども、平安期の史料からずっとあるのでしょうか。

あるいは、民俗資料においても、例えば通過儀礼において、お嫁さんを迎えに行ったときに坂迎えをやるとか、太平洋沿岸にずっと分布する浜降祭り、お祭りの中に坂迎えという装置が組み入れられているとか、あるいは新任の先生を迎えに行くときには、坂迎えに行くとか。言葉だけの問題になると、それはなかなか難しいんですけども、やっぱり境界概念というか、そういうものはどうやって考えた方がいいのかという問題が、1つあるんですが。

それと、山路先生がずっと先導されているんですが、最近、一宮とか総社をどうやって考えた方がいいのかというのが自分の問題にもありまして、特にもうちょっと広げちゃうと政庁の神というか、そこで守公神とか宿神をどのように実際祭ったのかという問題にもかかわってくるんです。土田先生が指摘された「国司巡拝」ですか、あのあたり以降、どういう展開がされているのか。あるいは中世になっても一宮に国司の代替わりの人が来たときに国祭りといわれるものが行われますが、その歴史的な実態というか、そのあたりも素人なもので、お教えいただけたらと思います。多分橋本さんがいらっしゃったら、非常に詳しいと思いますが、先ほどから山路先生も、最終結論みたいなことをおっしゃってましたですけども、儀礼の一般理論としてか、岩本さんもよく読んでいるように、我々はお祭りとか儀礼の一般理論というものを一番初めに勉強するときは、リーチという人の儀礼の時間ということから勉強し始めます。神祭りにおける非常に退屈な細則の履行、間違えないような履行があった後に、乱痴気騒ぎがあるというのは、リーチにいわせると、カーニバル文化です。ヨーロッパやアフリカなどのカーニバル文化で初めに非常に退屈な間違わないようにという儀礼の履行があった後に、乱痴気騒ぎがある。リーチは、ロールリブアーサルという、役割を転換させちゃうとか、その辺の乞食をつかまえてきて、王様の格好をさせて罵声を浴びせかけるというような、そういう構造というのをはっきり出している。あるいはベンセという人のお祭り理論は、最近非常に人類学ではやっているんですけども、例えば祭りと革命というのは、現象的には形態的に非常に連想させるものがあるけれども、お祭りというのは体制を補強するものだと思います。祭りというテーマが、30～40年前ぐらいから学説史的に積み重ねられているということは、多分橋本さんがいたらおっしゃるんじゃないかなと思いますけれども。

以上です。

■佐藤 国司を迎える国境での境界のお祭りというのは、まだ具体的なことがよくわかりませんが、むしろ教えていただきたいところでもあります。国司の神拝については、土田先生が書かれた後で、1～2論文があったと思いますけれども、それ以外については、あまりよく存じておりません。

国府の祭りというのは、「国府祭」(コウノマチ)みたいなお祭りがあるのだと思いますけれども、それもあまり歴史学のほうで論じたものはないのではないのでしょうか。それはむしろお伺いしたいところです。

■阿部(司会) 充実したお話が続いておるんですけども、もう少し、都市の民衆、お祭り、儀礼というようなことでお話ししたいという方がおいでになりますでしょうか。岩本さん、最後にもう

---

一度東アジアの都市をおまとめいただければ。

■**岩本** 一応、私からの問題提起はさきほどここで済ませたわけで、きょう聞いておまして、中国、朝鮮の郊祀は、外の「気」を中に入れるというのが向こうは都市や儀礼の基本構造であるのに羅城がないせいか、日本の儀礼はやはり四隅を決める。そしてそこで外部に排除していくということを、改めて思いました。方角、先ほども方違えの話が出てきましたけれども、中国の場合は方形ですから、東西南北ははっきりしているわけですが、朝鮮の場合、羅城は不定形で、王宮も高麗では東に向いていて、李朝から南面ということですが、地図を見ていただければわかりますが、景福宮も正確には南南東を向いているわけです。昌慶宮は正殿も正門も東向きですし、風水というのは別に方角は、主山を決めてやるわけで、穴から流れ出る生気の方法は問題となりますが、それほど絶対的な方位にはこだわらない。それに対して日本の陰陽道の方は別の発展をしていって、やはり丑寅の方向だとか、丑寅を嫌うなんていうのは、朝鮮には出てこないものだと思います。そういった受容というか、ある部分の変容していて、日本には道教や陰陽五行論が体系的に入っていないこともあるんでしょうが、大分違うということを痛感した次第です。

■**阿部(司会)** 都市の民衆の話もどんどん進んでしまいましたけれども、もう少しありましたらお願いしたいのですが、いかがですか。

きょうはシンポジウムということで、3つの山を司会のほうで設定いたしまして、進めてしまい、失礼した面も多いと思います。都市の構成、あるいは中枢部ということでは、そこに政務や儀式というものに伴う場、そういう幾つかの場があって、儀式と饗宴の二重構造といいますか、その機能に対応した場というものが時代ごとにあるんじゃないかというお話と、それから、都市の中では、祭礼というものに幕府なりが、京都に乗り込んでいろいろ行事をつけ加えたり、祭りの中に権力の場としての性格が端的に見られるということで、幾つかの大きな指摘といいますか、成果が出たように思います。

このシンポジウムにつきましては、先生方にお話しいただいたことを論文集という形でまとめるように聞いておりますので、きょうのお話も含めて、充実した報告が当然できるだろうと思います。それからきょうのシンポジウムについては、3年間やりましたことについて、急ぎ足ではございましたけれども、一応総括と展望ができたんじゃないかというように感じた次第でございます。

こんなことで、今回のシンポジウムについてまとめさせていただきますけれども、歴博としては、都市の研究を新しい課題によって来年以降も続けていくわけですし、歴博の展示としても皆様方のお力をお借りすることもたくさんあると思います。よろしく願いいたします。

それでは、きょうのシンポジウムにつきましては、これでピリオドをうたせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。